

2026 (丙午) 年の出生についての学生の意識調査

大見広規¹⁾*, メドウズ・マーティン²⁾¹⁾名寄市立大学保健福祉学部栄養学科, ²⁾名寄市立大学保健福祉学部教養教育部

【要旨】1906, 1966年には, 丙午の迷信に従い, 出生率や出生性比など, 人口動態統計に大きな変化が起こった。次の丙午年は2026年, 今から8年後であり, 子どもを出産する女性の年齢が30歳前後であることを勘案すると, 本学の学生が相当する年齢層となる。学生を対象に, 丙午出産についての意識調査を実施し, 2026年の人口動態統計の傾向を予測した。

回収率は15.4%と低く, 特に男性での回収数が少なかった。丙午迷信は約40%が知っていたが, 由来は知らないものが多かった。本人, 親, 親戚の80%以上が迷信を気にしていず, 男女とも約80%以上が, 丙午出産を避けようと思っていなかった。避ける場合は, 避妊が主であり, 人工妊娠中絶や虚偽の届けは考えていなかった。半数以上が, 2026年には人口変動が起らないと予測していた。

しかし, 20%弱の学生が気にしており, 女性は半数がパートナーや親など周囲に影響を受けると回答していること, さらに, 生殖医療の普及や, 近くなったときのメディアからの情報など, 様々な社会因子も予想されることから, 若干の出産数減少や, 出生性比の変化が起こる可能性は否定できないと予想した。

キーワード: キーワード: 丙午, 2026年の出生統計予測, 学生, 無記名自記式アンケート

I. はじめに

丙午 (ひのえうま) の迷信とは「丙午年生まれの女性は気性が激しく夫を不幸にする」というものである。もとは, 中国の陰陽五行思想とつながる迷信で, 丙午・丁未 (ひのとひつじ) 年は天災が多いというものであるが, 日本に伝わり, 江戸時代に丙午の年には火事が多いという話に変わった。さらに, 1683年の八百屋お七の放火事件で, 犯人の八百屋の娘お七が1666 (丙午) 年産まれであったこと, それを井原西鶴が, 浮世草子「好色五人女」に描いたことから, 「丙午年生まれの女性は気性が激しく夫を殺す」との迷信が広まったということである (消防防災博物館, 東京消防庁)。したがって, この迷信は日本人だけのものである。人口統計が正確につくられるようになった明治以降でも, 1906 (明治39) 年, 1966 (昭和41) 年には, この迷信に従い, 出生率や出生性比など, 出産・出生に関連する人口動態統計に大きな変化が起こった (大谷憲司 1991, 山口喜一 1967)。また, 丙午生まれの人々の, その後のライフコースを分析の対象とする調査もなされている (赤林英夫 2006,

2007)。この現象はアメリカに移住した日本人でも確認されている (角加苗 1973, Kaku 1975)。

次の丙午年は2026年であるが, 今から8年後である。人口動態統計をみれば, 2015年では, 第1, 2, 3子を設けた母親の平均年齢は, それぞれ, 30.7, 32.5, 33.5歳となっている (厚生統計協会 2017)。このように, 子どもを出産する女性の年齢が30歳前後であることを勘案すると, 本学の学生がちょうど子どもをもうける年齢層となる。そのようなことから, 現在の学生が, 丙午にどのような意識を持っているかを調査すれば, 8年後の丙午年の出産・出生に関連する人口動態統計の傾向を予測することができる。そこで, 本学の学生を対象にして, 丙午年の出産についての意識調査を実施した。

II. 対象と方法

1. 対象

対象は2017年度の本学学生のうち, 1~3年生の546名とした。

2. 調査方法

無記名の質問紙調査で, 質問項目は選択肢を示し選ばせて, マークシートに回答させた。質問項目は属性 (性別, 学年), 十干十二支についての知識, 丙午迷信についての知識, 丙午迷信がどのくらい気になるか, 女性には, 自分の丙午出産への意識, 男性

2018年11月22日受付: 2019年1月21日受理

責任著者 大見広規

住所 〒096-8641 北海道名寄市西4条北8丁目1

E-mail: hiohmi@nayoro.ac.jp

には、パートナーの丙午出産への意識、2026年の予想とした。

3. 分析方法

マークシートはリーダーで読み取りエクセルのファイルとした後、SPSS. 19. 0. 0, あるいは EZR. 1. 28 を用いて、統計学的に分析した。

4. 倫理的配慮

質問紙に回答から個人名が特定できないことと、回答は任意であることを明記した。また、学内の倫理委員会の承認を得た。

III. 結果

1. 回収

対象とした学生 546 名のうち 84 名（15.4%）から回答を得た。回答期限を延長し、メールにて協力依頼を対象学生に配信したが、この程度の回収率となった。特に男性で回収できたのは11名にとどまった。性別、学年の内訳を表1に示す。

表1. 対象者数と回答者数（回答率）

	性別	
	男性	女性
1年生	対象者数	161
	回答者数	33
	(回答率%)	(20.5)
2年生	対象者数	172
	回答者数	28
	(回答率%)	(16.3)
3年生	対象者数	124
	回答者数	12
	(回答率%)	(9.7)

2. 丙午についての基礎知識

子丑寅卯・・・といった十二支はほとんどの学生が知っていて、また、還暦の意味も半数以上が知っていたが、十干十二支となると知らない学生が多かった(表2)。自らの出産時期であるにもかかわらず、半数以上の学生は丙午迷信を知らず、さらにその由来となるとほとんどの学生は知らなかった。過去の丙午で出生に大きな変化が起こったという歴史を知っていたのも半数に達しなかった。また、その要因である実質の出生数減少や、虚偽の届出については、多くの学生が知らなかった。

3. 丙午迷信が気になるか

本人、親、親戚の80%以上が迷信を気にしていない／あまり気にしていないと回答していたが、一方20%弱はかなり気になる／ある程度気になると回答していた(表3)。

表3. 丙午迷信が気になるか

		n (%)
自分が気になるか	かなり気になる	5 (6.0)
	ある程度気になる	11 (13.1)
	あまり気にならない	34 (40.5)
	まったく気にならない	34 (40.5)
親が気にしているか	かなり気にしている	2 (2.4)
	ある程度気にしている	3 (3.6)
	あまり気にしていない	14 (16.7)
	まったく気にしていない	20 (23.8)
親以外の家族・親戚が気にするか	知らない	45 (53.6)
	かなり気にしている	1 (1.2)
	ある程度気にしている	4 (4.8)
	あまり気にしていない	9 (10.8)
	まったく気にしていない	17 (20.5)
	知らない	52 (62.7)

表2. 十干十二支、丙午迷信に関する認知

		n (%)
十二支の認知	知っていた	60 (71.4)
	だいたい知っていた	10 (11.9)
	あまり知らなかった	8 (9.5)
	まったく知らなかった	6 (7.1)
十干十二支（干支）の認知	知っていた	12 (14.3)
	だいたい知っていた	16 (19.0)
	あまり知らなかった	23 (27.4)
	まったく知らなかった	33 (39.3)
還暦の認知	知っていた	28 (33.3)
	だいたい知っていた	22 (26.2)
	あまり知らなかった	12 (14.3)
	まったく知らなかった	22 (26.2)
丙午迷信の認知	知っていた	28 (33.3)
	だいたい知っていた	6 (7.1)
	あまり知らなかった	13 (15.5)
	まったく知らなかった	37 (44.0)
丙午迷信の起源の認知	知っていた	4 (4.8)
	だいたい知っていた	9 (10.7)
	あまり知らなかった	14 (16.7)
	まったく知らなかった	57 (67.9)
1906, 1966 人口動態変動の認知	知っていた	28 (33.3)
	だいたい知っていた	11 (13.1)
	あまり知らなかった	11 (13.1)
	まったく知らなかった	34 (40.5)
1906, 1966 人口動態変動原因の認知（避妊や人工妊娠中絶）	知っていた	6 (7.1)
	だいたい知っていた	13 (15.5)
	あまり知らなかった	25 (29.8)
	まったく知らなかった	40 (47.6)
1906, 1966 出生性比変動原因の認知（虚偽の届出）	知っていた	5 (6.0)
	だいたい知っていた	6 (7.1)
	あまり知らなかった	21 (25.0)
	まったく知らなかった	52 (61.9)

4. 丙午年出産についてどうするかの予想

男女別に、女性には自身のこと、男性にはパートナーのことを想定して回答させた。男女とも約80%が、丙午出産を避けようと思っていなかった(表4)。

表4. 丙午出産をどう思うか

丙午出産を	n (%)	
	女性 自分は	男性 パートナーに
避けたい ／避けてほしい	1 (1.4)	1 (9.1)
できれば避けたい ／避けてほしい	14 (19.2)	1 (9.1)
あまり避けたい ／避けてほしいと思わない	25 (34.2)	1 (9.1)
まったく避けたい ／避けてほしいと思わない	33 (45.2)	8 (72.7)

5. パートナーの意見の影響

パートナーの意見の影響では、男女とも影響される、かなり影響されると回答しており、特に女性は約半数がかなり／ある程度影響されると答えていた(表5)。

表5. パートナーの意見の影響

パートナーの意見に	女性	男性
かなり影響される	3 (4.1)	3 (27.3)
ある程度影響される	33 (45.2)	2 (18.2)
あまり影響されない	17 (23.3)	1 (9.1)
まったく影響されない	20 (27.4)	5 (45.5)
パートナーが気にするとき	女性	男性
避けたい	19 (26.0)	3 (27.3)
／避けてほしい	25 (34.2)	2 (18.2)
できれば避けたい	25 (34.2)	2 (18.2)
／避けてほしい	13 (17.8)	3 (27.3)
あまり避けたい	13 (17.8)	3 (27.3)
／避けてほしいと思わない	16 (21.9)	3 (27.3)
パートナーが気にしないとき	女性	男性
避けたい	2 (2.7)	1 (9.1)
／避けてほしい	11 (15.1)	1 (9.1)
できれば避けたい	11 (15.1)	1 (9.1)
／避けてほしい	24 (32.9)	2 (18.2)
あまり避けたい	24 (32.9)	2 (18.2)
／避けてほしいと思わない	36 (49.3)	7 (63.6)

6. 親、親戚の意見の影響

自分の親・親戚の意見の影響も同様の傾向があったが、男性はあまり影響を受けない傾向があったが、女性は半数以上がかなり／ある程度影響されると答えていた。パートナー側の親・親戚の意見の影響でも、同様の傾向があった(表6, 7)。

表6. 自分の親、親戚の意見の影響

自分の親戚の意見に	女性	男性
かなり影響される	4 (5.5)	1 (9.1)
ある程度影響される	33 (45.2)	1 (9.1)
あまり影響されない	19 (26)	2 (18.2)
まったく影響されない	17 (23.3)	7 (63.6)
自分の親戚が気にするとき	女性	男性
避けたい	11 (15.1)	2 (18.2)
／避けてほしい	30 (41.1)	0 (0.0)
できれば避けたい	30 (41.1)	0 (0.0)
／避けてほしい	16 (21.9)	2 (18.2)
あまり避けたい	16 (21.9)	2 (18.2)
／避けてほしいと思わない	16 (21.9)	7 (63.6)
自分の親戚が気にしないとき	女性	男性
避けたい	2 (2.7)	1 (9.1)
／避けてほしい	13 (17.8)	1 (9.1)
できれば避けたい	13 (17.8)	1 (9.1)
／避けてほしい	22 (30.1)	1 (9.1)
あまり避けたい	22 (30.1)	1 (9.1)
／避けてほしいと思わない	36 (49.3)	8 (72.7)

表7. パートナーの親、親戚の意見の影響

パートナーの親戚の意見に	女性	男性
かなり影響される	7 (9.6)	2 (18.2)
ある程度影響される	36 (49.3)	2 (18.2)
あまり影響されない	12 (16.4)	3 (27.3)
まったく影響されない	18 (24.7)	4 (36.4)
パートナーの親戚が気にするとき	女性	男性
避けたい	11 (15.1)	2 (18.2)
／避けてほしい	34 (46.6)	2 (18.2)
できれば避けたい	34 (46.6)	2 (18.2)
／避けてほしい	11 (15.1)	2 (18.2)
あまり避けたい	11 (15.1)	2 (18.2)
／避けてほしいと思わない	17 (23.3)	5 (45.5)
パートナーの親戚が気にしないとき	女性	男性
避けたい	2 (2.7)	1 (9.1)
／避けてほしい	13 (17.8)	2 (18.2)
できれば避けたい	13 (17.8)	2 (18.2)
／避けてほしい	21 (28.8)	1 (9.1)
あまり避けたい	21 (28.8)	1 (9.1)
／避けてほしいと思わない	37 (50.6)	7 (63.6)

7. 仮に丙午出産を避ける場合どうするか

もし、仮に丙午出産を避けようと思った場合にどうするかについてみれば、女性では避妊が主であり、人工妊娠中絶や虚偽の届けは考えていなかった(表8)。

表 8. 仮に丙午出産を避ける場合どうするか

		仮に丙午出産を避ける場合		
		避妊を選 ぶ	人工妊娠中 絶を選ぶ	虚偽の届 出を選ぶ
女性	可能性がある	24 (33.3)	0 (0.0)	1 (1.4)
男性	考えてほしい	1 (9.1)	1 (9.1)	1 (9.1)
女性	ある程度可能性が ある	16 (22.2)	1 (1.4)	4 (5.7)
男性	ある程度考えてほ しい	1 (9.1)	0 (0.0)	0 (0.0)
女性	あまり可能性はな い	10 (13.9)	13 (18.1)	12 (17.1)
男性	あまり考えないで ほしい	2 (18.2)	1 (9.1)	2 (18.2)
女性	まったく可能性は ない	9 (12.5)	40 (55.6)	35 (50.0)
男性	まったく考えない でほしい	3 (27.3)	5 (45.5)	4 (36.4)
女性	そもそも出産を避 けるつもりはない	13 (18.1)	18 (25.0)	18 (25.7)
男性	そもそも避けたい ではない	4 (36.4)	4 (36.4)	4 (36.4)

8. 2026 年の予想

約半数が、2026 年には人口変動が起こらないと予測していた（表 9）。

表 9. 2026 年（次の丙午）の人工動態の予想

1906, 1966 に比べ	n (%)
同じ程度に起こると思う	5 (6.3)
程度は少ないが起こると思う	33 (41.8)
ほとんど起こらないと思う	33 (41.8)
まったく起こらないと思う	8 (10.1)

IV. 考察

人口統計が正確にとられるようになった明治以降の人口動態をみると 1906 年の女子出生数は、前年に比べ約 7%の減少、翌年は 16%の増加であり、1966 年の丙午での変動はさらに大きく、前年に比べ 25%の減少、翌年は 42%の増加であった（赤林英夫 2007）。出産の抑制や人工妊娠中絶のほか、年末年始の出産の場合は、出生日を丙午からはずす虚偽の届けがされた可能性がうかがわれる（坂井博通 1988）。過去の研究によると、地域レベルであるが江戸時代にも同じ現象があったと推測されている（黒須里美 1992, 坂井博通 1995）。丙午の出生が問題とされるのは女兒のみなので、出生性比をみるとその変化はもっと明らかである。1906, 1966 年には男児の出生が増加しており、その前後では女兒が増加している。

今回の調査では、男女とも学生の 80% 以上が迷信を気にしておらず、また、丙午出産を避けようと思っていなかった。学生の親や親戚もあまり気にしていないようだとして学生は認識している。迷信そのものを知らなかったということも、その要因として考えられる。実際に、2026 年が近づくと、様々なメディアが取り上げると予想され、そのときに始めて気になりだすのかもしれない。そうすると、この世代の人々がどのように反応するかについては、現時点では予測ができない。

1906, 1966 年に行われたであろう虚偽の届出も、かつて助産師の補助による家庭出産が多かった時代とは異なり、現在はほとんどの出産が病院等の医療機関で行われていることを考えると、極めて起こりづらいと想定できる。

丙午について、将来予測をした研究はほとんどないが、何世代も経て迷信が伝承されていくかを、数学的な理論分析をしたものがあつた（Hara 2015, Tanaka 2012）。それによると、

Tanaka CM らは

- ・女性が信じていて受胎調節に強く影響し、子どもに伝えると強化される。
- ・受胎調節を男性がコントロールしている場合、子どもに伝えても世代を経れば消えていく。
- ・半数以上が信じてなければ、世代を経ると消えていく。

Hara M らは

- ・信じてる人と半分信じる人が多く、男性がパートナーとして丙午生まれの女性を避けるなら、世代を経ると強化される。
 - ・信じる人がいても、信じない人と半分信じる人が、パートナーとして丙午生まれの女性を避けないなら、世代を経ると消えていく。
 - ・迷信は父→子より、母→子への影響が強い。
- と結論付けている。しかし、この理論は何世代も継承されていくかどうか、といった長いスパンのもので、2026 年の次回がどうなるかといったものではない。

一方、近年体外受精などの生殖医療での出生も増加しており、今や出生の 5% 以上が体外受精による。このように、出生が人為的にコントロールされるようになった時には、生殖医療を利用する場合は丙午にわざわざ生もうとは考えない可能性も否定できない。そうすると、人口動態の変化に多少の影響があることも考えられる。

20% 弱の学生が気にしており、女性は半数がパートナーや親など周囲に影響を受けると回答していることから、これらを勘案すると、1966 年ほどではないにしても、若干の出産数減少、出生率低下や、出生性比の変化が起こる可能性は否定できない。

V. 結語

本学学生を対象に 2026 年にむかえる丙午年についての意識調査を実施した。回収率は 15.4% と低く、特に男性での回収数が少なく、十分な検討ができなかった。生殖医療の発達など、不確定要素もあるが、人口動態の変化は、1966 年ほどではないにしても、若干の変化が起こる可能性は否定できないと予想した。

謝 辞

本調査にご協力いただきました学生の皆さんに感謝いたします。

文 献

赤林英夫 (2006) NFRJ03・NFRJ98 からみた丙午生まれのその後。第 2 回家族についての全国調査 (NFRJ03) 第 2 次報告書 No.1: 夫婦, 世帯, ライフコース 183-195。
赤林英夫 (2007) 丙午世代のその後 - 統計から分かること。日本労働研究雑誌 569: 17-28。

大谷憲司 (1991) 1960 年代以降の日本の期間出生率変動と「ひのえうま」。関西大学経済論集 41: 295-323。
角加苗 (1973) ひのえうまと経口避妊薬 在米日本人の出生率の推移。公衆衛生 37: 714-717。
黒須里美 (1992) 弘化三年ヒノエウマ - 文化と人口の地域性。日本研究 6: 35-55。
厚生労働統計協会 (2017) 出生順位別にみた母の平均年齢と第 1 子出生までの平均期間の推移。国民衛生の動向 2017/2018: 62。
坂井博通 (1988) 「ひのえうま」の死産について。人口問題研究 186: 58-63。
坂井博通 (1995) 昭和 41 年「丙午」に関連する社会人口学的行動の研究。人口学研究 18: 29-38。
消防防災博物館。むさしあぶみに見る明暦の大火と俗説「振袖火事」
http://www.bousaihaku.com/cgi-bin/hp/index.cgi?ac1=R204&ac2=R20402&Page=hp_view (2018/9/12)
東京消防庁。三の酉の年は火災が多い?
http://www.tfd.metro.tokyo.jp/libr/qa/qa_35.htm (2018/9/12)
山口喜一 (1967) 最近の出生動向, とくに「ひのえうま」にまつわる出生減について。人口問題研究所年報 12: 56-60。
Kaku K, Matsumoto YS (1975) Influence of a folk superstition on fertility of Japanese in California and Hawaii, 1966. AJPH 65: 170-174。
Hara M, Lee JH, Iwasa Y (2015) Cultural evolution of hinoeuma superstition controlling human mate choice: The role of half-believer. J Theor Biol 385: 40-49。
Tanaka CM, Iwasa Y (2012) Cultural evolution of a belief controlling human mate choice: dynamic modeling of the hinoeuma superstition in Japan. J Theor Biol 309: 20-28。

An exploratory survey on a questionnaire about 2026 hinoeuma birth to students.

Hiroki OHMI¹⁾*, Martin Maedows²⁾

¹⁾Department of Nutritional Sciences, Faculty of Health and Welfare Science, Nayoro City University, ²⁾ Department of Liberal Arts Education, Faculty of Health and Welfare Science, Nayoro City University.

Abstract: Large drops in the number of childbirths and in the ratio of female to male births observed in 1906 and 1966 were caused by the hinoeuma superstition in Japan. The year 2026 is designated as the next hinoeuma year. Students currently around 20 years old will be likely to have babies 8 years from now. Therefore, we conducted a survey of attitudes toward childbirth during a hinoeuma year by an anonymous self-administered multiple-choice questionnaire, and attempted to predict 2026 vital statistics for childbirth. Recovery rate was quite low at 15.4%, and among male students especially the response rate was only 11%. Around 40% of students knew about the hinoeuma superstition, however, few knew of the origin. Around 80% of students and their parents and relatives did not believe in the hinoeuma superstition, stating they would do nothing to avoid a hinoeuma birth. If they were to avoid a hinoeuma birth, they would prevent conception, but not have abortions or report false birthdays. Over half of them predicted that the change in vital statistics for childbirth in 2026 will not occur.

We, however, do not deny that some changes will occur, because around 20% of students took some notice of the hinoeuma superstition, and a half of female were influenced by partner's or parental intentions, in addition, there is likely to be some influence on this from the further development of reproductive medicines and by media reporting.

Key words: hinoeuma, prediction of 2026 birth statistics, students, anonymous self-administered multiple-choice questionnaire.